

【要 旨】

現在、日本ではさまざまな領域でTEACCHプログラムの理念に基づいた自閉症支援が実践されている。また、アセスメント（以下評価）に基づく支援が重要視されており、本人の状況に応じて構造化を活用した支援が展開されている。しかし、どのように一連の支援プロセスが組み立てられていったのか、なぜそのような構造化の活用に至ったのかについて記述されているものは少ない。そこで本研究では、TEACCHプログラムの理念にのっとり、評価から始まる一連の支援プロセスとそこで活用されている構造化のアイデアの変遷について1つ1つ具体的に記述する。そのことにより、本人の目標である自立のための支援に対して見直しと再構造化をしていくプロセスの重要性を明らかにすることを目的とした。研究対象は、中度知的障害の自閉症児1名（以下B児）である。研究方法は、評価を行い目標設定・支援計画を立てる。そして実施の際には行動

観察を行い、再評価・再構造化を行った。この手順を繰り返す経過を1つずつ具体的に記述した。

本発表では、B児が目標としている「自立」に対する優先課題である「指示書を使って、1人で簡単な料理ができるようになる」ことを取り上げ、B児に適した指示書が完成に至るまでの経過を発表する。

取り組みを通して、B児に適した指示書を作成するための構造化のポイントが明らかになった。ベースとしてのフォーマルな評価に加え、インフォーマルな評価を実施し、必要に応じて再構造化を繰り返すことが、より支援の個別化を推進することになることを再確認した。そしてフォーマルな評価のみではなく、インフォーマルな評価を加えることで、本人への支援の充実が図れることが明らかとなった。

B児が自立して活動できるために行った評価から指示書を完成させるまでの一連のプロセスを1つずつ丁寧に記述することで、「構造化」が目的化した支援のあり方を見直すことの一助となると考える。